I-15

# 我が国の 1910 年代にみられる建築家の都市および住生活へのまなざしについて

**On the architect’s view of urban and Lifestyle habit in the 1910s in Japan**

○早乙女崇[1]，　田所辰之助[2]
Takashi Soutome[1], Shinnosuke Tadokoro[2]

This study describes the architect's interest in urban and Lifestyle habit as seen in the 1910s in Japan. The study was conducted from a bird's eye view in order to extract proposals for cities and dwellings found in architectural journals and to clarify the period, rather than focusing on individual architects. The architects as social reformers, who began by pointing out the growth of architects, were concerned with the aesthetics of cities and dwellings. This clarified the point that improvements in living conditions were indicated by individual architects before they were initiated by the government system, and explained the need to add a 'social' axis to the overview of the architectural world in the same period.

## １．はじめに

本稿は，明治から大正への転換期にみられる建築家の都市および住生活への視点について述べたものである．

開国以来の西洋化が達成された明治から大正への転換期において，「建築」そのものが問われることになった．明治時代の封建的社会から自立することを求めた転換期の建築家たちは，国家に代わる建築の主体を社会のなかに見出そうと試みる．「建築における社会」から「社会における建築」※1) へと立場を転換させ，時勢の影響を受けながら種々の模索が行われるようになる．

このような，転換期の建築家に示される社会へのまなざしは，従来の建築史研究において確たる評価軸を形成しているとは言えない．建築家個人の理念を通して，建築が自立し，社会の中での建築を求める姿を描き出す叙述はなされているが[1)]，それらを時代の広がりのなかで鳥瞰的，横断的に扱ったものはない．

本論では，転換期のもつ特徴を時代性として把握することを目的としている．その際，建築家によって示された，「都市」，「住居」への提言を雑誌から抽出し，それらの特徴と変遷をたどる．また，建築の定義が再構築される不安定な状況であったこの転換期の時代において，「なぜ社会を標榜したのか」という視点から建築家の社会へのまなざしを評価したい．

## ２．「修養主義」からの展開

1910 年に建築学会でいわゆる“様式論争”とされる討論会が行われる．「我国将来の建築様式を如何にすべきや」と題されたこの討論会は，建築の様式を「どのように折衷するか」という意味のみではなく，単純な西洋様式模倣に対する反省を含んだものであった．

討論会に示される西欧様式模倣への懐疑は，建築の存立自体を問い直すきっかけとなり，「建築とは何ぞや」「藝術とは何ぞや」といった疑念が建築界へと広がっていく．このような時代において，伊東忠太は「今日の世態は何事も研究時代」であると述べ，また「修養主義」であることが「着実にして穏健なる針路」であることを述べ[2)]，また同様の「修養」は高松政雄らによって述べられている．1910 年代のはじめに，建築そのものを問う機運が発生していた．

## ３．都市美観・住生活へのまなざし

建築および建築家の価値を問う機運に際して，佐野利器は「建築家の覚悟」として，建築家の指針を述べる．ここでは，建築家を芸術家と無理に解釈する必要がないことを述べながら，建築のデザインをビルディングタイプごとに変える必要があると説く．そして，「如何にして，最も強固に最も便益ある建築物を最も廉価に作り得べ」[3)] くことを理想とし，建築の実用性を強めていくことが必要であると述べている．一方で，美的側面を排除することを強調していたのではない．あくまでも，時勢として美的側面より優先すべきことと述べており，建築の美的側面を排除しようとしたわけではなかった．

実用性と建築の美への関心は，双方を扱う場として住宅・都市美観へと向けられる．建築評論家黒田鵬心を始まりとして，岡田信一郎や後藤慶二らが都市と住

１：日本大学理工・院（前）・建築，　２：日本大学理工・教員・建築

宅に関する建築観を示し．その中で，建築世界社から『住宅建築』[4]という単行本が掲載される．同書には，伊東忠太や佐野利器，岡田信一郎，後藤慶二といった当時の主要建築家が多数参加しており，同時の建築界が住宅への関心を向けていたことがわかる．「発刊について」では，「我が建築界全体よりして一般社会に向かってする新提供なりと見て頂きたい」として，建築界を挙げて提案される住居への提言を一般に受け入れてもらいたい旨を示している．また，計画的なプランを紹介しつつも，日常生活の中での「悪習」を問いただす指摘が多数掲載されている．

「悪習」を指摘する姿勢は，住居への提言と同様に一般社会に向けられていたものだった．これらの活動は，生活改善や社会改良として説明され，1910 年初めに方向づけられた「修養主義」と相まって自身らを含めて社会全体の成長を目指すものであった．

## ４．まとめ

1910 年になり，建築そのものを問う姿勢が固まった．その際，建築の美と実の存在意義も問われることになったが，建築の価値を問うことをきっかけとして，都市における住生活へまなざしが向けられるようになる．建築家は「社会の容れもの」[5]となるための建築を目指し，「建築趣味」を社会へ普及することを目的とした．その際に考えられた，「社会改良家」という建築家像は，自身らを含めて下流階級を救済する性格のものであった．住環境そのものを社会資本の一つとして捉える，原始的社会主義思想の特徴がみられる．

1920 年に生活改善同盟会は，衣・食・住にわたる改善を目的として文部省より設置された[6]．官制による本格的な活動が展開される前年代に，先に示した「社会改良家」としての建築家像が醸成されており，民間から官制への展開という点で重要だと思われる．

また，最終的に社会制度へと発展する問題を建築家が率先して意識し，出発点には実用性を強調するだけでなく，美的側面も重要視してる点は，住宅史のみならず建築家の社会のなかでの役割を考えるうえで重要な事実であると考える．同時代の建築界を概観する上で，既往の近代建築史上で重要視されている「実用」と「美」の二項対立の展開に「社会」という軸を加え，考察を行っていく必要があると考える[7]．

## ５．※脚注

※１）『日本の建築明治大正昭和（７）ブルジョワジーの装飾』，三省堂，1980 年に掲載された石田潤一郎博士の論考内で用いられている．

## ６．参考文献

[1] 吉野良祐「1910 年代における高松政雄の社会派建築評論　「建築家の修養」と議院建築問題」『日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸) 』2019 年 9 月，pp.543-544

[2] 伊東忠太「昨是今非（(一）～（五))」『建築雑誌』，358～362 号

[3] 佐野利器「建築家の覚悟」『建築雑誌』1911 年 7 月

[4] 『住宅建築』建築世界社，1916 年

[5] 岡田信一郎「社会改良家としての建築家」『建築雑誌』，345 号，1915 年

[6] 内田青蔵，藤谷陽悦，大川三雄『図説・近代日本住宅史』鹿島出版会，2008 年

[7] 長谷川堯『神殿か獄舎か』相模書房，1972 年

表１　建築関係雑誌にみられる都市・住居関係の論考（抜粋）

| 年月 | | 建築・都市美観 | 都市・住生活習慣 | その他（「修養主義」的論考） |
|---|---|---|---|---|
| 1910 | 6 | | | 伊東忠太「我国将来の建築様式を如何にすべきや」『建築雑誌』282号 |
| | 9 | | | 高松政雄「建築家の修養」『建築雑誌』 |
| | 11 | 黒田鵬心「帝都の美観と建築」『朝日新聞』、連載全6回 | | |
| | 12 | 高松政雄「「帝都の美観と建築」を読む『朝日新聞』 | | |
| 1911 | 7 | | | 佐野利器「建築家の覚悟」『建築雑誌』、295 |
| 1912 | 2 | | 岡田信一郎「住宅建築について」『建築工芸叢紙』 | |
| 1915 | 7 | | 後藤慶二「ミスキアトー（感想）」『建築画報』第6巻7号 | |
| | 9 | | | 岡田信一郎「社会改良家としての建築家」『建築雑誌』、345 |
| | 10 | | | 野田俊彦「建築非芸術論」『建築雑誌』、346号 |
| 1916 | 1 | 岡田信一郎「都市の仮説的装飾に就いて」『建築画報』、第7巻1号 | | |
| | 4 | 岡田信一郎「都市建築」『建築世界』、第10巻4号 | | |
| | 5 | 岡田信一郎「都市と建築」『建築画報』第7巻5号 | ★『住宅建築』、建築世界社 | |
| | 9 | | 後藤慶二「衣食住と湿度との問題」『建築世界』第10巻10号 | 伊東忠太「昨是今非」（（一）～（五））『建築雑誌』、358～362 |
| | 12 | | 後藤慶二「冬の住宅」『趣味の友』第2巻12号 | |
| 1917 | 9 | | | 後藤慶二「建築と社会」『建築画報』第8巻9, 10号 |
| | 11 | 岡田信一郎「寝室の設備について」『住宅』第2巻11号 | | |
| 1918 | 2 | 後藤慶二「建築的冒涜の東京」『美術旬報』150号 | | |
| | 4 | | 後藤慶二「壁と唐紙と」『現代之図案工芸』47号 | |
| | 8 | | 岡田信一郎「都市に於ける住宅問題」『建築雑誌』、380 | |
| | 9 | 岡田信一郎「都市問題私見」『美術旬報』 | | |
| 1919 | 8 | | 佐野利器「都市と住宅：規格統一」、『建築雑誌』、390 | |
| 1920 | 7 | | 山崎静太郎「其の文言について――「生活改善同盟会」の住宅改造に努められ居る方々へ」『建築雑誌』、407 | |
| 1921 | 6 | | ★『建築雑誌』416号 | |
| 1923 | 10 | | 岡田信一郎「新生活に適する住宅」『住宅』第8巻10号 | |